

日付:2014年6月29日／聖書:創世記4:1～16

主題:「さすらう者」

この物語が書かれた時代は、イスラエル王国の最も繁栄したソロモン王の時代と言われる。その歴史的背景からこの物語を見る。

この時代のイスラエルは、王政国家として経済的にも、宗教的にも栄え、多くの国民はその繁栄ぶりに自信と誇りを得ていた。しかし、その繁栄によって身分や財産の格差は広がり、豊かな者はより豊かに、貧しい者はより貧しい生活を強いられていくという国の現状があった。そんなイスラエルは、かつてエジプト王国で奴隷として苦しく、貧しい生活を強いられていたが、神はその民を解放し、約束の地へと導いた。今やその恵みを忘れたかのように、王政国家を築き、弱者が排除されている。

物語は、イスラエルが神に向き合うことをせず弱者の排除へと向かわせた国家の暴力性に対する批判が込められている。「カイン」とは「イスラエル」を言い表していると見ることが出来る。主なる神は問う「お前の弟アベルはどこにいるのか」。カインは「わたしは弟の番人か」と返答する。イスラエルも問われている。「排除された民はどこにいるのか」と。ここは、イスラエルの繁栄に満たされていた者が、国家の罪に、自分たちの罪に気づかされた者の信仰告白として、聞いていくことが出来る。主は問う「お前の弟の血が(排除された民の血が)土の中からわたしに向かって叫んでいる。・・・お前が流した弟の血を(民の血を)、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。・・・地上をさまよひ、さすらう者となる。」

この物語は、イスラエル王国の繁栄を批判しつつ、主の御心を生きようとした人々は、まさに自分たちが罪ゆえの「さすらう者」であり、同時に、罪にあってもなお生かされている「しるし」があることを自覚していたのかと思う。今日の私たち教会は、この物語を自分たちの物語として、どう読み直すものか。今や、着実に戦争へと向かおうとするこの国に対して、教会は何をし、何をしようとしているのか。私たちの教会も、この世を「さすらう者」であり、神の「しるし」を押された教会であることを自覚し、悔い改めと勇気をもって、「地の塩、世の光」としての歩みをさせて頂きたい。(神谷)